

論文審査の結果の要旨

氏名：金子千香

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：Milton's Latin Poems: From the Pastoral to the Political

（ジョン・ミルトンの初期ラテン語詩群に関する研究）

審査委員：（主査） 教授 野呂有子

（副査） 教授 マイルズ・チルトン

神戸市外国語大学教授 西川健誠

金子千香氏の論文は、William Shakespeare (1564-1616)と並び称される、17世紀英国の叙事詩人 John Milton(1608-74)が青年期に執筆したラテン語詩群を包括的かつ精緻に扱うことによって、従来にはない新たな価値をこれらに付与した。

ミルトンは37歳時に、1645年版『詩集』(*The Poems of John Milton, both English and Latin compos'd at several times*)を出版している。本詩集では、第1部に英詩群、第2部にラテン語詩群(全25篇)が収録されている。ミルトンの時代の英国においては、高等教育のあらゆる場で、当時ヨーロッパの国際共通語であったラテン語詩が使用されていた。授業科目はすべてラテン語で行われ、教師と学生の応答もラテン語、提出物もすべてラテン語で執筆することが要求された。当時の出版物もその半分はラテン語によるものだったことから、ミルトンが本詩集を英語とラテン語の2部構成としたことは当時の慣行を反映していると言える。

『詩集』出版の時期は Oliver Cromwell 主導の反国教会主義が高まり、大主教ロードが処刑され、クロムウェル指揮下のニューモデル軍がネイズビーの戦いで国王軍を破り、やがてはチャールズ1世の処刑が敢行される。共和制国家の誕生に向かって国運を左右する大事件が集中的に起きた時期である。1645年版『詩集』刊行は、イングランド国民に対して進みゆくべき道を示す意図を持っていたと考えられる。

金子論文は総頁数231頁、全5章から成る。

第1章では、全25篇のラテン語詩を掲載順に形式面と内容面から簡潔に整理し、手短な説明と主だった批評動向を紹介している。一般にミルトンの執筆時期は3段階に分けられる。第1期の牧歌時代、第2期の宗教・政治論文時代、第3期の叙事詩時代である。金子氏は、本詩集のラテン語詩の配置と流れの中に牧歌時代から政治論文時代への移行が認められると指摘する。これまでの日本のミルトン研究において、彼のラテン語詩をこのような形で整理して論じた研究は皆無と言って良い。

第2章では、ギリシア神話における詩神 Phoebus (アポロン) に直接・間接の言及がある複数のラテン詩を精読する事で、ミルトンが自らに課そうとする詩人像の変遷・成長を追う。ポイボスとの関係が、呼びかけを受ける関係、呼びかけに詩の形で応え始める関係、自らをギリシア・ラテン・イタリアの叙事詩人達と同様に詩神ポイボスの崇拝者として位置付ける関係、そして最後にポイボスの「子」として「父」に倣いつつ「父」から独り立ちする関係へと変化する中に、一般的な意味でのパストラルな詩人＝牧歌詩人では終わらずに、国民の牧者＝パスターたる詩人を目指すミルトンの意識が徐々に明確化している、という主張には説得力がある。これまでのミルトン研究に散見された、ラテン語詩においては享乐的、英語詩においてはピューリタンのという安易な二分法に、実証的な形で修正を施す事になる。金子氏の指摘は国内外のミルトン研究においてこれまでなされておらず、貴重な研究成果だと言える。

第3章においては、複数のラテン語詩の分析を通して、将来の叙事詩人たらしめるミルトンが、ギリシア・ローマ以来の抒情詩の伝統的トポスである Carpe diem (今、この時を楽しめ) と対峙したミルトンが、これを頑迷に拒絶するのではなく、重要なキリスト教的徳目、純潔／貞節(chastity)によって、徐々にこれを超克する過程が認められると指摘する。これもまた、ミルトン作品における古典的・人文主義的要素と聖書的・宗教的要素を安易に対立的に捉える傾向に修正を施すものである。

第4章では、ミルトンが自然と時代変遷の関係について歌った、“*Naturam non pati senium*”を中心に論を展開する。ミルトンの自然観が、後に母国語で執筆される、世界に名だたる長編叙事詩 *Paradise Lost* に認められる自然観へと連鎖し発展していくと指摘する。飢饉・旱魃といった自然界の「転落」と見える現象を、自然自体が老い朽ちていくというギリシア・ローマ的自然観でなく、創造者たる神が定めた慈愛ある本来は不変で慈愛ある自然法則が人間の罪により罰として停止される、というユダヤ・キリスト教的自然観で説明している、と金子氏は論じている。ここは第2期の宗教・政治論文に認められる自然観をも併せて総合的に究明する必要がある。それによって17世紀後半の自然思想中のミルトンの位置がより鮮明に浮かびあがることになると考えられる。

第5章は、本学位請求論文の要とも言えるべき章であり、若手研究者としての力量が発揮されている。英国史に関心を持つ者なら誰もが知るように、1605年に、いわゆる火薬陰謀事件（the Gunpowder Plot）が発覚した。これは当時、英国で弾圧されていたローマ・カトリック教徒の過激派により英国議会議事堂に爆弾を仕掛け、国王とプロテスタントが大勢を占めていた議員全員をすべて殺戮しようという陰謀だったとされている。難を逃れた国王側はこの事件を利用して国王演説や出版物、国教会の牧師達による説教を通じて「王権神授説」および国王による政治的・宗教的支配体制の強化を目論んだ。

ミルトンは「火薬陰謀事件」を題材とした6篇のラテン語詩（エピグラムを含む）を執筆している金子論文ではこれらを連作詩として扱い、分析・考察を行った。ミルトンは反カトリックという点ではイギリス国教会系の文人・聖職者と立場を同じくするものの、王権神授説に立つジェームズ1世には批判的な立場を取っている。詩群を結ぶ「11月5日について」（*In Quintum Novembris*）において、陰謀を暴くのが国王ではなく神である点、陰謀から救われるのが英国国民である点に、「国王の影を薄くする」というミルトンの戦略が認められ、王権への批判が現れているという指摘は的確である。

これは、ミルトンが、クロムウェル率いる英国共和制のラテン語担当秘書官として国際共通語ラテン語を用いて、共和政府の正当性を広くヨーロッパ全土に喧伝し、後の民主主義的精神のバイブルとなった『イングランド国民のための弁護論』へと発展する思考方法である。ミルトンの「火薬陰謀事件」連作詩を金子論文の視点と手法で分析したものは国内外を問わずこれまでに存在しない

金子氏は、当時の国王側の言説について、今年春、日本大学に導入された *EEBO* (*Early English Books Online*) を駆使して、火薬陰謀事件のあった1605年からイングランド革命の勃発する1642年までに出版された説教集等に基づいて考察を行っている。ちなみに *EEBO* から得られる資料は、従前であればその一つ一つが Huntington Library や British Library 等に出向かなければ入手できなかった貴重資料であることから、金子氏の研究は当該分野における、これからの研究の質を飛躍的に高めるための画期的手法を後続の研究者たちに示すものともなる。

論文全体の評として、ミルトンが人文主義的な抒情詩人から一国の叙事詩人へと成長していくという指摘は、ミルトン批評では定番ともいえる。しかし、ラテン語詩というそれ自体が汎欧的な人文主義と分ち難く結びついた器の中で、イングランドという一国に身を捧げた宗教的・政治的詩人になって行かんとするミルトンの意図がどう表出しているか、という問いの設定は、これまで十分にされてこなかった。この問題設定をするために必要な英語・ラテン語双方の語学力の高さゆえに、英米にも、ましてや、日本ではその傾向は顕著であった。巻末に論文本体で扱ったラテン詩について、氏自らの日本語訳を付した金子氏の論文は、問題設定の新規性もさる事ながら、訳詩の部分においても、日本におけるミルトン研究に大きな寄与をするものであり、若手研究者の仕事としては十分に評価できる。

付言すれば、素直で簡明な英語で書かれた本論文は、読者にわかりやすいものであった。修辞上のソフィステイケーションが不足しているが、研究者としてのキャリアの出発点にある金子氏の今後の自覚的修練によって、その点は十分に克服可能だと考えられる。

よって本論文は、博士（文学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 年 月 日